

訪問日：2017.8.18 / エリア：京都

NPO法人 スウィング



回答者 木ノ戸 昌幸さん(NPO法人スウィング理事長)

表現活動に至った経緯

本格的に表現を掲げた活動「オレたちひょうげん族」は2008年に始まりましたが、スウィング設立当初から自由に5・7・5を詠む文化がありました。僕は愛媛出身で、愛媛には思いついたら詠んで、投函できる俳句ポストがあったり、夕方のニュースで毎日愛媛ゆかりの俳人の俳句を紹介するようなコーナーもありました。おそらくそういう文化の延長で、スウィング内でも5・7・5を詠むようになったんだと思います。それが今の詩作につながっています。

僕自身は、大学を卒業してから就職をせず、この業界に入るまで遺跡の発掘をしたり、引きこもり支援をしたり、劇や舞台をやったりしてきました。社会になかなか馴染めなかった側です。引きこもり支援の側に立っている人の中にも、画一的に「経済的自立ができるようになること」ばかりをゴールにしている場合が多いことに気が付きました。経済至上主義に馴染めずにしんどくて、引きこもりになっているのに、支援者はその社会に戻るための支援をしたがります。それよりも、自信や生きる力を取り戻すには、一見、無駄なことをやるのが一番です。山登り、スポーツ、ちょっとしたいたずらなど。アートもその一つだと思っています。

スウィングにとっての障害者福祉

何をしようときっちり決めずに始めた活動ですが、「障害福祉の枠を超える」というのはもともとあったテーマです。それは障害福祉に狭さ、窮屈さを感じるから。メンバーの絵画や詩の展示もその目標のもとに行っています。障害者アートは共生社会や相互交流の旗印として掲げられていますが、実際はそうなってはいません。ただ作品が飾ってあって、鑑賞者がそれを見るだけになっています。

それもいいですが、それだけではもったいないと思います。

アートを通じて誰かと誰かが出会ったり、知り合ったり、語り合ったりすることに意義を感じます。ただ単に生身の人間が対面しても、交流は難しい。だからこそワークショップや公開制作、似顔絵コーナーなど、人と人が出会う媒介や入口になるような仕掛けを企画しています。

福祉とかNPOに対する固定化された見方やイメージを攪乱したいと思っています。一貫してNPOとしての市民活動をすることで、本当の意味での社会福祉をしたいんです。スウィングは福祉の制度の枠組みを使っているから、福祉施設であることは間違いないですが、制度は、支援者と施設を利用する被支援者を分けてしまう現状があります。それを解体したい。市民と言うと、メンバーも職員も含めた存在。みんなそれぞれが一市民。障害があるかないか、性別、年齢も関係ない。全く公平な一人ひとりになりますよね。そこで、その人その人の生きる力とか共生が生まれていくと思うし、実際これまでがそうでした。

地域との関わり

成功していると思うのは、「ゴミコロリ」という清掃活動です。青いゼッケンを着けて、火ばさみを持って街を歩いているだけで、「ありがとう」と言ってもらえますし、自然にコミュニケーションが発生します。「ゴミコロリ」には、地域の近所の子どもも、遠くから参加しに来てくれる人もいます。

「ゴミコロリ」には僕たちが勝手に作った「まち美化戦隊ゴミコロレンジャー」というヒーローが複数登場しますが、全員が「ゴミブルー」です。全身青いスーツの格好で歩いたら、はっきりに言って異様ですが、この上賀茂地域では既に普通の景色になっています。はじめは不審者通報をされてパトカーに取り囲まれたりもしましたが、やっていることはゴミ拾いで、何も悪いことはしていません。むしろ僕たちの存在や活動を知ってもらえた機会だったし、今では平気で交番に拾った貴重品を届けたりしてい

障害のあるなしを超えた一市民、NPOとして障害のある人への偏見をオモシロ・オカシク打ち破るという方針のもと、絵・詩・ものづくりの芸術創作活動「オレたちひょうげん族」や清掃活動「ゴミコロリ」、京都人力交通案内「アナタの行き先、教えます。」など社会へ働きかける活動を展開する。

〒 603-8074
京都市北区上賀茂南大路町19
TEL/FAX: 075-712-7930

ます。ゴミブーがいると手を振ってくれたり、子どもが寄ってきたりします。そして今ではゴミブーの格好でなくて、生身の人間の格好で活動していても同じように手を振ってくれるようになりました。

「ゴミコロリ」は、マイノリティが街の中で当たり前化していく、いい例だと思います。面白さをもって、姿を見せ続けることでだんだん当たり前の風景になっていくんだと思います。

アートの捉え方・取り組んでいる課題

ダサさを意図的に大切にしています。「おしゃれ」は人を選別しますが、「ダサイ」ほうが誰もがとっ付きやすい。障害者アートにもハイアートのようにどこかおしゃれな雰囲気があり、文化好きの人がわざわざ見に行くというような感じがします。障害者アートは、アートが社会で普遍化される前に、言葉になってしまい、マーケットの原理の中で、ただモノとして消費されてしまっている印象があります。また、障害者＝アートに秀でた人という発信がされてしまっており、それは一部の人のことであって全体を包括してしまうのはおかしいと声を上げています。

そもそも文化としてのアートが日本には根付いておらず、やはり特別なものという感じがします。アートという言葉自体がおしゃれで、さっと言えない感じがします。まずは表現すること自体の価値を大切にしたいと思ったり、根付いていないからこそアートをもっと広義に捉えられないかと考えています。分かりやすい作品だけではなく、「既存の価値観や固定観念を揺るがせるモノやコト」、「日常に抜けを創り、生きやすさを拡大するモノやコト」、こうした試みや行為をアートとして捉えたいと思っています。

何か大きなことをするのではなく、自分たちの射程圏内を面白くしていくことが大切です。例えば「ゴミコロリ」であれば、上賀茂圏内が射程になります。足元に根付いた活動を地道に積み重

ねてゆくことにしか答えはないと考えています。